

オーケストラの コルネットの現在



◎東京都交響楽団首席トランペット奏者

高橋 敦

洗足学園魚津短期大学を経て洗足学園音楽大学卒業。トランペットを津堅直弘、関山幸弘、佛坂咲千生の各氏に師事。第65回日本音楽コンクール1位、第13回日本管打楽器コンクール1位。新星日本交響楽団（現東京フィル）を経て1999年に東京都交響楽団首席。宮崎国際音楽祭、霧島国際音楽祭、セイジ・オザワ松本フェスティバルなどへ定期的に参加。ソリストとして国内外のオーケストラや吹奏楽団と共演。ミュンヘンARD国際音楽コンクールの審査員も務める。洗足学園音楽大学客員教授、東京音楽大学講師。

◎読売日本交響楽団トランペット奏者

田中敏雄

1994年東京音楽大学卒業。トランペットを津堅直弘氏に師事。1992年にサンドポイント（米国）音楽祭に参加し、室内楽をH.フィリップス氏、W.マルサリス氏の両氏に師事。在学中に関西フィルハーモニー管弦楽団に入団。現在、同団を経て読売日本交響楽団トランペット奏者、トウキョウモーツァルトプレイヤーズ、なぎさプラスヴリステン、Mostly Trumpet [THE MOST]、Trumpet Ensemble [The Schilke Five] メンバー。上野学園大学非常勤講師。ミュージックスクール『ダ・カーポ』講師。

Osamu Takahashi × Toshio Tanaka

今なぜオーケストラでコルネットが普通に使われるようになったのだろうか？

作曲家がスコアに指定したにもかかわらず、トランペットで代用されることが多かったオーケストラのコルネット。が、ここへ来てコルネットを使う動きが洋の東西を問わずに拡がりつつある。一体何があったのだろうか？

記事協賛：株式会社グローバル

——今ほどのオーケストラも普通にコルネットを使っている状況ですか？

田中 楽譜に「cornet」とか「piston」の指定があれば、コルネットを使うというのが、今ほどのオーケストラでも普通になって来ましたね。

高橋 日本だけじゃなく、これはもうワールド・スタンダードだと思う。ペリオーズの幻想交響曲は、コルネットがオーケストラで初めて使われた曲の一つですが、10年くらい前までは、「幻想」をやるにしても、スコアにあるコルネット2本をトランペットで代用し、トランペット4本でやることの方が多かったんです。

その一番大きな理由は、当時まだC管のコルネットが手に入らず、C管トランペットを吹くオーケストラ奏者にとってB管のコルネットは使いづらかったということ。ところがその後、1本のコルネットでもB管にもC管にも出るというコンバーチブル型のコルネットが登場し、それをオーケストラ奏者が使い出した……これが今のオーケストラが積極的にコルネットを使い出した走りだったんじゃないかと思います。

田中 そうですね。

コルネットとトランペットの ねじれた関係

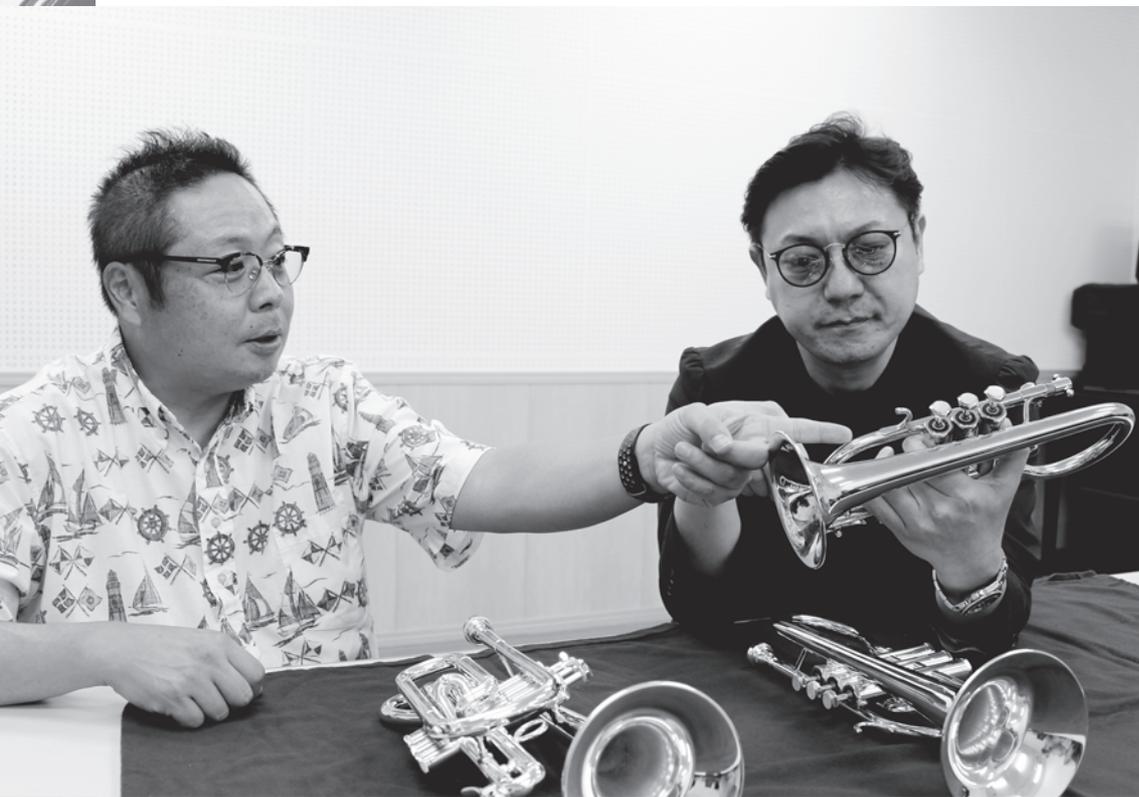
高橋 以前は、指揮者から「コルネットをやってくれ」と言われない限り、コルネットは使わなかった。

僕、いまちょうど「兵士の物語」(ストラヴィンスキー)をやっていますが、この曲など未だにトランペットで演奏する人が沢山います。チャイコフスキーの「白鳥の湖」

コルネットをオーケストラで使うことは 今ではワールドスタンダード。

や「眠りの森の美女」などもフランス的な編成で、ペリオーズと同じトランペット2管、コルネット2管ですけど、トランペットで吹く方が楽だし、トランペットと一緒の音を吹くことも多いので、昔はみんな

がトランペットで吹いていた。プロコフィエフの「ロメオとジュリエット」も、トランペット3本の中に1本だけコルネットが入っていて、コルネットの柔らかいソロも出て来ますけど、トランペット・パート



ブリティッシュ・スタイルの金管バンドで圧倒的な人気を誇るシルキーのE♭管コルネットを手にする高橋さん。田中さんも「この形もめっちゃめっちゃきれいですね!」。高橋さんは「ベルの後ろの巻きが大きいことが特徴的だけど、あえてこのデザインにした理由があるんだろうね」。

より大きな音で高い音を吹く箇所もあることから、やはりトランペットで演奏されて来た。

でも、もともとコルネットがフランスで生まれた時は、今よりもっと軽くて明るい音がしていたんですよ。その当時のトランペットはナチュラルですから、トランペットの方が深みがあつてくすんだ音がし、コルネットの方が華やかな音だったんです。

言えは、わりと大きな音が出るような楽器が開発され、コルネットでも埋もれずにそのまま演奏できるようになったことが大きいと思います。

高橋 昔は、コルネットと言えはブリティッシュ・バンドの楽器で、深いマウスピースを使い、メロウな音でという……。でもそれだとオケでは太刀打ちできない。フォルティシモで吹くと、体力だけでもって行か



コルネットはもともと今よりもっと軽く明るい音がしていた。それが現代になりトランペットと逆転してしまった。

ットは身体への負担も大きかったんです。各メーカーから吹きやすい楽器やマウスピースが出て来た。選択の幅が広がったのが、オケ奏者がコルネットに持ち替える

ると、持ち替えの煩わしさから、どうしても「どれかを減らして楽したい」と思ってしまう。

と、その昔、某オケの首席が、メインがマーラーの交響曲、前プロがストラヴィンスキーというコンサートで、持ち替えが面倒だからとストラヴィンスキーもロータリーで吹いたら、楽器にうるさい指揮者に激ギレされたという話を聞いたことがある(笑)。

高橋 ドイツもの以外でもロータリーを使うウィーンフィルやベルリンフィルだったら、どうだったんだろうね?(笑)

ところが、現代になってコルネットの音はトランペットと逆転し、より柔らかく、優しい音になって、オーケストラでは音が埋もれてしまうことから、コルネットを使う意味が薄れてしまった。それでコルネットに持ち替える人が少なくなっただけでいい。

田中 オケのコルネット・パートはメロディを吹いたり、大事な場面が使われることが多いんです。以前のようなコルネットだと、トランペットの音量を落とさないとバランスが取れずに、オケ全体のバランスやサウンド感までも変わってしまう。

ようになった一番大きな要因じゃないかと思えます。

リンフィルなどももう使っているんですよ? 田中 使っています、普通に。

田中 やはり楽器ですね。良い楽器がいろいろと出て来たということ。さっきの話で

高橋 昔は、その後、シルキー始めいろんなメーカーから様々な楽器やマウスピースが発売されて、オーケストラでも問題なく対応できるようになった。以前のコル

高橋 音が立たないといけない時もあれば、隠れないといけない時もある。すべてを含めて、自分のコントロールで、自分の音色感で吹けるものを選びたいし、それが選べるようになったということですね。

高橋 吹く人によるかも知れないね。でも、それこそヨーロッパのメーカーがウィーンフィルのためにコルネットを作っているくらいですからね。

田中 —にもかかわらず、いま使う人が多くなったのは、何があったのですか?

コルネットは円錐管の比率が多く トランペットと比べると倍音の幅が少し 拡がる感じがする……。

たと言つても、もちろん、コルネットらしい音色が出るものを皆さん求めているわけですよ。

田中 ももちろん、それがなかったら使う意味がないですから。

——となると、先ほど話に出た「コルネットらしい」音色がどんなものが問題になりませんか？

高橋 オーケストラの中でのコルネットのあり方としては、柔らかい音や優しい音などはあまり目的とされていませんですよ。先ほども言ったように、ベルリオーズのコルネットは、もつと軽く明るい音で演奏されていました。

——現代ではコルネットとトランペットの音が逆転したのであれば、トランペットでコルネット・パートを吹いても問題ないようにも思えますが、それでも現代のコルネットを使う意味は？

高橋 トランペットだとコルネットの軽やかさが出ないとか、ふわっとしたニュアンスが出ないとか、やはり違いは大きいと思います。はつきり明るく吹こうとすると、トランペットだとどうしても直線的でやや四角い音になってしまう。コルネットを使うと、はつきり吹いても、節々にふわっとしたニュアンスが出ます。そうした細かな音の違いですね。

田中 トランペットでコルネット・パートを吹くのももちろんアリだと思うけれど、僕にはイメージが湧かないですね。ト

ランペットを持つと、どうしても直線的な響きを出そうと身体が勝手に反応してし

まう気がする。コルネットを持った時の、少し横に拡がるような響きの作り方とは変わってきます。

コルネットは円錐管の比率が多いので、倍音の出方も変わると思えます。C管トランペットと比べると、倍音の幅が少し広がる感じがする。それがコルネットを使う最大の理由かな。イメージしやすいんです

よ。「幻想」にしても、わりと華やかにコルネットが使われてますけど、トランペットで吹くと直線的な鳴り方がして、コルネットだと良い意味で音に幅が出る。いずれにしても、これは良い悪いの問題ではありませんが。

高橋 目隠ししたら、案外なに使っているのか分からなくて、自己満足と言われる



Schilke Cornets

上からE♭管GP、C管「A2C」SP、B♭管「XA1」SP。B♭管には他にロングモデルもある。
B♭管、C管、E♭管モデルのいずれも仕上げはCL、SP、GPから選べる。



今のコルネットが持ち替えやすく なったのは、我々が気づかないうちに 楽器の円錐率を低くしたから？

かも知れない。でも明らかに、コルネット
で吹くと違うという意識は僕らの中には
ありません。「幻想」の「断頭台の行進曲」で
もフィナーレでも、トロンボーンやホルン
などとの音の融合の仕方が違うんですよ。

コルネットが小回りが利く理由

——コルネットと言えばアーバンに代
表されるように、機動性に富み、小回りが
利くイメージがあります。

高橋 細かなメロディを吹くのは確かに
楽ですよ。

田中 コルネットの方が楽器の抵抗感が
強いので、逆に小回りが利くのかもね。マ
ウスピースも、普通の人は若干小さめにす
るので、楽器の反応も良くなる。

高橋 まっすぐ遠くに息を入れるのがト
ランペットだとしたら、コルネットの場合
は、わりと口先で音を転がすような感じで
吹ける。そういうた吹奏感がニュアンスの
違いにも現れるだろうし、細かな音の切れ
が出て、速いパッセージも吹きやすくなる
と思う。

田中 こうしたことは今まであまり考え
たことがなかったけど、確かにそうだね。

高橋 マウスパイプもずっと短いし。

田中 マウスピースはVカップなどの深
めものを使う。そこにトランペットと同
じスピードの息を入れると、もつと息が加
速するでしょうね。おまけにクルークがト
ランペットよりラウンドしているので、そ
の分抵抗が加わる。息のスピードがついて
抵抗があるということは、取り回しが利く
ようになるということ。

高橋 コーナーをギュインと曲がるよう
な。

田中 トランペットだと長い分、こちら側
で息を飛ばさないといけないけど、コルネ
ットだとすごくコントロールしやすい。

——コルネット・マウスピースのシャ
ンクはかなり短いですね。

高橋 トランペットの半分まではいかな
いけど、かなり短いです。

——短くてトランペットよりも細い。細
いのは楽器が円錐管だから？

高橋 その名残じゃないのかな。昔のコル
ネットはもつと細かったわけです。ホルン

のマウスピースでも吹けたかも知れない。
田中 楽器の円錐率もつと高く、細めで
入ってベルに向かって大きく拡がってい
くような。

高橋 分かった、そこだよ！結局今のコ
ルネットが持ち替えやすくなったのは、楽
器の円錐率を低くしたからですよ。

田中 たしかにそうかも知れない。

高橋 最近のコルネットが吹きやすくて
持ち替えやすいと思えるのは、少しづつ円
錐管じゃなくなってきたからかも……
我々が気づかないうちにね。

——それって、コルネットを捨てるこ
とになるのでは？

高橋 いや、音色はそれでも全く違うの
で、持ち替える意味はありますよ。

田中 楽器のほかの設計部分で音を柔ら
かくし、円錐率を低くすることで吹きやす
くしたと？ 凄いですよね、そうやって楽
器は進化して行くんですから。

シルキーのコルネットの魅力は 音程の良さでバランスの良さ

——そうした中で、シルキーのコルネ
ットはどんな性格のコルネットですか？

高橋 もともと音に柔らかさを持つてい
るので、メゾピアノで演奏した時はコルネ
ット特有のメロウで柔らかい音色感が出
せる一方で、プロコフィエフのように大き
くて高い音、張りのある音が必要とき
は、トランペットのように直線的な息の入
れ方をすると、非常に張りのある音が出ま
す。マウスピースも、それほど深いものを
使わなくてもよいので、普段使っているマ
ウスピースとのギャップも少なくなると
思う。

じつはシルキーのE♭管コルネットは、

ブリテイッシュ・バンドでめちゃくちゃ人気があるんですよ。日本の金管バンドのE♭コルネットの人たちは、ほとんどがシルキーを使っているといわれるほど。それほど憧れの楽器になっている。シルキーのピッコロトランペットが圧倒的な人気を得ているのと似た話ですね。短い管はシルキーがいかにか優秀かということ。

田中 D/E♭管もシルキーを使っている人が多いですね。

——何がそんなに良いんですか。

高橋 何と言っても音程の良さと、バランスの良さ。反応など、いろんなことも含めての。

田中 反応が良くて、吹くのが楽なんですよ。コントロールしやすい。

レナルド・シルキーさんは元々、トランペットの設計では、リードパイプからベルまで余計なものをつけずに抜がって行くのがよいという持論の持ち主だった。その方が音程は絶対に良くなると。そのコンセプトで作られたのがシルキーの「B」シリーズなんです。だから、Bシリーズには支柱がない。

そうしたノウハウがあるから、コルネットや特殊管の楽器の音程もとても良いんだと思う。特にピッコロトランペットでは、音程の良い楽器が少なかった中で、シルキーを初めて吹いた時なんか、「ああ、めちゃくちゃ楽だ！」と思いましたが。

高橋 ロングのストレートタイプのピッコロトランペット(P514)は特にセンセーショナルだったよね。

田中 シルキーさんのコンセプトが特殊管にも活かされて、誰もが信頼して使える楽器になったんだと思う。

シルキーのC管コルネット

——高橋さんはシルキーのC管コルネットをいつからお使いですか。

高橋 2年ほど前からです。

シルキーのC管コルネットの在庫が1本あるというので買おうと思ったら敦君に先に買われてしまった。

田中 シルキーのコルネットはいつも在庫があるとは限らないですね。2年前、敦君(高橋氏)とコルネットのマウスピースを作りシカゴのシルキーの工場に行った時、そこでC管コルネットを吹いたら、め

ちゃくちゃ良かったんですよ。日本に在庫が1本あるというから、日本に帰ったらすぐに買おうと思っていた。ところが、タツチの差で敦君に買われてしまった。

高橋 帰ってすぐに買ったから(笑)。

——シルキーのC管コルネットは何がそれほど良いのですか。

高橋 やはり、まずは音程が良いこと。申し訳ないけれど、他社のC管はビククリするくらい音階が並ばなかったりします。そもそも、ドレミファソラシドがきちんと並ばない。マウスピースとの相性もあるとは思いますが。

それと、ダイナミックス・レンジがシルキーはとてもしっかりしていること。コルネットはもともとコンパクトな楽器だから、ピアノはいいんだけど、フォルテがこじんまりと収まってしまふ感じがある。でもシルキーのコルネットは、トランペットのような張りのある音が出せたり、柔らかい音も出せて、表現の幅がとても大きい。今やっている「兵士の物語」など、あれだけ小さな編成だと、ピアノは本当に小さなピアノを出さないとけないし、コントロールがとても難しいんですが、このシルキーのC管だともう凄くやりやすいですね。音程が良いから、音程を気にすることもない。「兵士」は今回シルキーで初めて本番をやりますが、とても楽しみです。

そう言えば、「兵士の物語」では面白いエピソードがあるんです。何年前か前までシャルル・デュトワと毎年、宮崎音楽祭の「野外コンサート」で「兵士」を演奏していたんですが……

(以下次号)

